

イメージの母子インタラクション

——継母子のロールシャッハ・テストからみた母子相互作用——

井原成男*

はじめに

カウンセリングの仕事をしてながら、たえず自問していたのは、①自分(=治療者)はこの人(=患者)を本当に理解することができるのだろうかという問と、②自分はこの人をどのような規範(=社会)の中に適応させていくのかという問であった。そのような中で、自分が曲がりなりに③他者(=患者)と共感できたと思う瞬間は、例えてみれば母親(あるいは父親)が我が子を理解しえたと思うときに似ているのではないかと考えた。

この①～③の次元を、現在考察を進めようとしているイメージの側面からみるならば、それぞれ、イメージの①個人的次元、②共同的次元、③対的次元に対応させてみるができるのではないかと思う。筆者は先の報告¹⁾で、人間のイメージを①個人的世界の次元、②共同的世界の次元、③対的世界の次元に分け、母親が子どもを理解し、共感していくプロセスは、子どもが自分の個人的世界のイメージを理解し共感してもらうことによって自らは共同的なイメージの次元へ社会化されていくというプロセスを生み出すのではないかと述べた (Fig. 1)。

ひるがえって、このようなプロセスは上述のごとく、カウンセリングのプロセスにも類似している。我々のカウンセリングのプロセスにはそれ故に、その人のもつ母子関係や父子関係が反映(=転移)されやすいという構造があるといえないであろうか？

カルフ²⁾は箱庭療法の設定を「自由であると同時に保護された1つのある空間」であるとし、そ

れは「母と子の一体性」をつくりだすような雰囲気の中にあると述べているが、これもまた治療のもつ親子関係の側面(この場合は母子関係の側面)をよく言い表わしていると思う。子どもはこのような雰囲気の中で自己実現へと向うのである。

筆者は自分自身の個人分析体験³⁾のさなかにコーチ(=寝椅子)の上で、分析者の解釈の言葉を聞きながら、まるで子宮の中において母の言葉の響きを感じているようなイメージ体験にとらわれたことがあった (Fig. 2)。これなどもカルフの述べたような雰囲気と同じ状況かもしれない。

ところで、筆者は人間のイメージをこのように3つの次元に分ける考え方を吉本⁴⁾の次のような考えから敷衍した。彼は次のようにのべる。……ぼくなんか、人間の基層心理というものを含めて、人間の観念の働きがもっている世界を大体三つに分けてかんがえるわけです。

そのひとつはどうかということかと云いますと、じぶんのじぶんに対する関係の世界、それはふつうの言葉で云えば、個人の、つまり自分自身の内面の表現になっている、そういう世界というもの。もうひとつは、自分と他のひとりの関係の世界。これは広い意味で云えば、性の世界だとかんがえます。(中略)要するに、ひとりの人間がじぶん以外のひとりの人間と関係する世界が、性の世界だというふうにかんがえます。だからひとりの人間と他のひとりの人間のあいだに、もしなんらかの意味で交流があるとすれば、それも広い意味で、性の世界に含まれるということができるとおもいます。

(中略)もうひとつの理解の基軸は、ひとりの人間が共同の世界——社会という言葉でも国家という言葉でもなんでもいいんですけど——でどういうふう振るまうか、あるいはどういうふうな心の持ち方を持つか、そういうひとつのべつの基軸です……

しかし、ここで注意しておかなければならないのは彼自身、この3つの次元を、相互に関連し

*東京慈恵会医科大学小児科心理

〔〒105 東京都港区西新橋3-25-8〕

(長野大学産業社会学部)

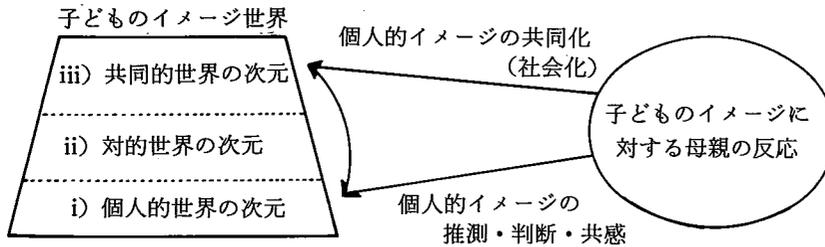


Fig. 1 イメージの3つの次元と母親の反応

てはいるが他の次元から独立したものであり、むしろ本質的に相入れない性質をもっていると考えている点である。彼の問題意識は次の2つの引用文の中によくしめされているように思われる。

……曖昧な〈倫理〉の解除

——(編集者)そこで吉本さんは、まず、全〈幻想領域〉の構造を解明する鍵として、

- (1)共同幻想=国家, 法, 宗教
- (2)対幻想=セックス, 家族
- (3)個人(自己)幻想=芸術, 文学

の三つの軸を設定して、この三つの軸の相互関係を解明していけば〈幻想〉領域は統一的に解明できるのではないかと演繹的手続きを踏まれるわけです。(中略)

そこで内容に立入ってうかがうまえに、まず、この書の最大の問題である〈対幻想〉軸の設定なのですが、この設定に至るプロセスをお話いただければと思います。

吉本 いちばん根底におかれたモチーフは、個体が現実世界とその歴史的な由緒からおわされてしまう〈倫理〉の受けとめ方にたいする疑問でした。

〈マルクス〉主義であってもなくてもよいのですが、政治運動が現実に行われるとき、あるいは、国家や階級といった共同的概念と具体的に関わろうとするとき、そういう行動や理念にたいして、個人はいつもその共同性を転倒して、じぶんの内部に〈倫理〉として受けとめてしまうのです。

“貧しい人々を解放する”というのは正義ではないか、そういう運動や理念は肯定されるべきではないかといった、万人が異論の余地なく認めるような場所で

り方に疑問符がついてまわる問題、個々人がすべて受け入れてしまったとき、その正義が肯定できないという矛盾と息苦しさが伴ってくる問題——これはいったい何なのかという疑問が、ぼくには根本的なモチーフとしてありました。

それは共同性の次元の領域と、セックスのかかわる家族の次元の領域と、個人的な領域の3つが混合されて一挙に到来することからくる錯綜を、ただひとつの〈倫理〉として受けとってしまう矛盾がやってくるのだというように解決していったのです。

それら三つの概念水準は次元がちがうのだから、まず分離されてそれぞれに固有な概念の次元に差しもどされ、各々の概念の占める位相について、その領域の水準に概念を置いてかんがえなくては、この相互関係の矛盾は解決しないとおもったのです。『世界認識

〈倫理〉はもっとも危うくされます。この理念が〈倫理〉的に個々人にやってきた場合、ある種の愚劣さ、苦々しさ、どうしても肯定できない矛盾、自己欺瞞みたいなものが伴ってくることもあるでしょう。肯定しながらその現実的な在



Fig. 2 コーチをつかった分析の一場面⁴⁾

の方法』⁹⁾……

……個人の意識（ぼくは幻想という言葉を使っていますが）、個人の幻想に属する層と、対なる幻想、つまり個人が他の一人の個人と関係づけられるときにでてくる意識の領域、これはいってみれば家族とか男女の性の世界ですけれど、そういう観念の層と、それから、国家とか法律とか社会とかに属する共同の観念の世界、共同の意志の世界というように層に分離してその関連性をつけられれば、たぶんわれわれは共同の目的、意志と個人の意志とのほさまに引きさかれて苦悶するという阿呆らしいことはしなくてもすむのではないか、そういう意味での倫理的なことは解除されるのではないかと考えていったのです。『言葉という思想』⁹⁾……

筆者自身は吉本の、この問題意識をまだよく理解できないが、イメージを単に①個人的世界の次元②対的世界の次元③共同的世界の次元に分け、母親の子どもへの理解・共感によって、子どもが共同性を獲得するのだという筆者の考えにはまだいくつかの注釈が必要であるということだけはよく分かった。

筆者のように考えるためには少なくとも、母一子という対幻想が、共同幻想と矛盾なく存在しているという前提が必要なのだが、これはあまりにも楽観的な見方である。筆者なりの言い方をすれば、母から受け入れられたようにこの社会も自分を受け入れてくれるのだというのはあまりにも楽観的な見方のように思われるということになる。母が自分を受け入れてくれたようには受け入れてくれない社会（共同性）もあるというのは自明のことであるように思われる。

村瀬⁹⁾は母親との関係（対幻想）でえられた社会性が、必ずしも共同性につながる社会性ではないことを自覚的にとりあげ、次のようにのべている。……〈社会性〉と〈対偶性（対幻想のこと—引用者）〉の区別と関連、これはもっとハッキリと自覚されてとりあげられなくてはならない。六ヶ月までであると、乳児はだいたい誰が抱いても喜こんでいたのだが、六ヶ月をすぎるとあたりから知らない人に対しては表情がかわりだし、そしていよいよ不安になると泣き出したりしはじめる。その時はもう母親が抱かないと泣きやまないというような事も起ってくる。こういう現象をみて一般的にわかることは、母親が〈対象〉として

ハッキリ指定されてきたということであろう。母親と他の人とを〈対象〉として区別して受けとめられるようになったわけである。そこからそれは人に対する意識の高まりとして、対人関係＝社会性の現われだとされるわけである。ところが私たちは、そこに〈社会性〉ではなく〈対偶性（対幻想）〉という特異な心的現象の現われをみるのである。

〈対偶性〉とは何か。すでに予備考察でのべてきたように、それはひと言で言えば、人間が1対1でかわる時にみせる心的な〈同着〉の関係である。〈社会性〉とはあくまで人間が多と一の関係の中で現われる人間関係であり、その〈多〉に対する〈一〉の関係は、誰におきかえられてもかまわない抽象的な〈一〉の関係である。〈対偶性〉はそうではない。これは特定の一に対する特定の一の関係（ペア—引用者）であり、そこでは簡単に置きかえのきかない関係が成立している。その特定の関係というものの具体的な中身が、心的な〈同着〉というより、より融合的な人間関係の形態なのである。……

ここで主張されていることは人間が母との間にもつ社会性といわゆる社会性（＝共同性）とは違っているのだということである。

以上みたように①個人的イメージが②母親の側の子どもの理解と共感（対的イメージ）によって③共同的イメージに単純に高められていくわけではないことが明らかになった。したがって、筆者の先の図式（Fig. 1）は次のように改められなければならない（Fig. 3）。（さらに個人的世界の次元についても同様に、理解される部分と理解されない部分があると思われる。）

対偶関係によって共同性になった部分はいつまでたっても対的次元なのではないかという反論もなり立ちそうであるが、筆者としてはやはり、対偶関係によって共同性につなげられていく部分もあるのではないかという見方をすてがたいのである。

吉本⁹⁾は『共同幻想論』の中で、「〈母系〉制の社会とは家族の〈対なる幻想〉が部落の〈共同幻想〉と同致している社会を意味する」とのべて、対的世界の次元と共同的世界の次元が同一であると見えるのは、そう見えるだけであるにすぎないと断定している。吉本⁹⁾によれば、これは初期の農耕社会に固有なものである。

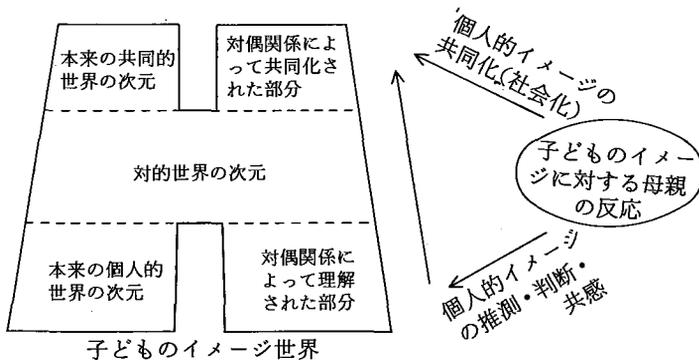


Fig. 3 イメージの3つの次元と母親の反応 (Fig. 1の改訂版)

……かれら(初期農耕社会の人々)の共同の幻想にとっては、一対の男女の〈性〉的な行為が〈子〉を生むという結果をもたらすことが重要なのではない。女〈性〉だけが〈子〉を分娩するということが重要なのだ。だからこそ女〈性〉はかれらの共同幻想の象徴に変容し、女〈性〉の〈生む〉という行為が、農耕社会の共同利害の象徴である穀物の生成と同一視されるのである。……

もしも、日本の社会を母系制的な社会と考えるならば、¹⁰⁾母(女性)は生み、育て、はぐくみ、受け入れるものとして、あたかも共同幻想と一致しているように見えるという根拠は、上述のような我々の社会のもつ特殊性の中に見いだされるかもしれない。筆者が対偶関係(=母子関係)によって共同性につなげられていく部分をすてがたいとみたのは、筆者が生きているのは、やはり、この日本の社会なのだという実感に裏打ちされたものなのだと思う。

まえがきがあまりにも長くなり過ぎたが、Fig.3に図式化したような筆者の考えをまとめ、明確にしておくためには必要なことであった。

さて、このような(Fig.3)筆者の見解に立って、母親が子どものイメージ世界を理解・判断・共感していくプロセスが、子どものイメージ世界を社会化(=共同化)していくとするならば、この機能が人生の初期において欠けている継母子の関係においては、どのようなプロセスがおこるのだろうか? ここで報告する症例において、この母親は6歳から継母となっている。したがって、この母子関係においては初期の6年間が欠けた形で母子関係が始まっている。さらに実母は本人を放置していた。この2つの欠落が上述のプロセスにどの

ような影響を与えるかをみてみたい。もし、子どもの社会化(共同化)にとって、母子関係(=対偶関係)が決定的な役割を果すならば、この子どもには、社会性の欠落している部分が増えると思われるからである。これが本論の第一の目的である。

さらに筆者は、これまでの報告^{1,11-16)}で、Anorexia Nervosaの症例^{11,12)}をイメージのコミュニケーション能力からみて重度、夜尿の症

例^{13,14)}を中度、心因性頭痛の症例¹⁵⁾を軽度とし、さらにこれらの症例と比較するためにノーマルな児童についても報告した¹⁶⁾が、その中で欠けていたのは、母が子どものイメージ世界をどのように推測・判断・共感するかの方角のみで、逆方向、子どもが母のイメージ世界をどのように推測・判断・共感するかについてみるということであった。この方向についてもみてみたいというのが本論の2番目の目的である。

I. 症例

症例：S・A。14歳の男児。

主訴：夜尿が毎晩ある。ないのは年に2、3日。爪かみがある。顔の色が青い。

家族構成：父(42歳)前妻との間に15歳になる娘がある。S・Aの姉になる。現在別居中。父と現在の継母との間に5歳の娘がいる。したがって現在の家族は父・母(継母)・姉・本人・妹の5人。

現症歴：身体面には異常なし。これまで薬物療法、暗示療法、漢方薬療法など行っただが効果なかった。1回寝たら目が覚めない。S・Aに3つの願いをきいてみると①夜尿が治る②すぐ起きること③早寝早起きができるようになることという。自分の願いというよりいつも親に言われていることだろう。

生育歴：小1の3学期に姉とともに引き取られた。それ以前の事はわからない。実母は家を出ていたので恐らく放って置かれたのではないかとと思うとのこと。実母は自分の事は奇麗にしても子どもの世話はしない人であつたらしい。引き取ったとき既に夜尿はあった。小4の頃までは寒いと昼間ももらしていた。恥ずかしいという意識はない。

大人しいが依固地なところがある。急に身体に触れるとびっくりする。お風呂で髪にお湯をかけたらびっくりしていた。水が怖く、暗い所が怖かった。成績は普通で、中より少し下とのこと。筆者が本人についてもった第一印象は、いつも鳩が豆鉄砲をくらったような顔をしているということだった。また、ソワソワして落ち着きがない。話はよくしてくれるが、自分の話にのめり込み、空想がふくらんで時々、筆者に分からなくなってしまうことがあった。本人にいつ頃から記憶があるかきいてみると、小2の頃以降しか憶えていないという。(しかし、後になって、それより少し前のことも思い出した。それによると、今の母親のところに来る少し前に他の女の人に預けられたことがあったという。これは実母のことなのだろうか？ 実母のことは何も憶えていないという。筆者はむしろ思い出したくないのではないかと思った。) 現在の母はとても好きだという。排尿については、小2の頃、授業中にも漏らしたことがあったという。50分我慢できるようになったのは小学校4、5年の頃からだという。K県から小2の時引っ越した。友人に臭いといっていじめられ泣くことがあったという。喧嘩は避けるようにしている。疲れ易い。人の事があまり気にならないという。知らない人でも話せる(このことからS・Aのアタッチメント能力が発達していないことが予想される)。人の考えている事が分からない。母の意見では、忘れん坊であり、夜尿に限らず基本的な生活習慣がついていない。ポーカーフェイスでしれっとして嘘をつくので母は余計腹立たしいという。

心理テストの結果：PF スタディの結果、内罰、無罰がともに低く、外罰は逆に73%(平均より30%高い)と極度に高い。これは外から見た印象と違っている。また、自己防衛が強く、要求への固執が低いことから、S・Aの外からみた大人しきは防衛の結果と思われる。またS・Aのしれっとした傾向はこの要求固執の低さから説明できるように思われる。筆者はS・Aに面接していて、なにか水に漂う浮草と対面しているような手ごたえのなさをかなり長い間感じ続けた。TATのストーリーは、初めついていけるのだが、途中から話が空想にのめり込んで、筆者はついていけなくなった。

治療について：初期の母子関係の詳細は不明だ

が、S・Aには他人に関心をもち、他人の気持ちを理解し、適切な行動をとっていくという対人関係の能力が十分には発達していないように思われる。したがって、さしあたってはS・Aの夜尿の原因を上述の心理因+習慣形成の不全と考え、S・Aの現在の状態の原因を母親とともに追求し、テストや面接などの様々なデータから得られたS・Aの内面世界のイメージを母親に呈示することにした。このような母へのカウンセリングに加えて、S・A本人に対してはトークン・エコノミー法^{13,14,17,18)}を使った。トークンにはシールを使い、S・A自身の作ったカレンダーに、夜尿のなかった日にはシールを貼り、このシールが一定の枚数(10枚)溜ったら報酬(reward)と交換ということにした。この結果、開始後3週間で5日連続してない日がでた。さらに2ヶ月後には1カ月のうち50%ない日があった。3ヶ月後までに $\frac{1}{2}$ ～ $\frac{1}{2}$ ない日が続き、4ヶ月後には70%ない日があり、5ヶ月後には80%に達した。その後、このあたりのパーセンテージを多少変動し、開始後一年の時点ではある日の方が2、3日という状態になった。夜尿のある日についても時間的には明け方近く(6時頃)であり、量的にもパンツが少し濡れるぐらいに減っている。

ただし、母親は依然として、S・Aの対人関係の可笑しさ、感情音痴振りを心配しており、本人自身へのインテンシブな精神療法を希望している。

II. 母子のロールシャッパ反応

母子のロールシャッパ反応について考察するための原資料としてプロトコルをそのまま記載した。

それぞれのカードについて、本人の反応、母親の反応の順に示した。母の反応については《M》で示した。自由反応段階については(Per.)、質疑段階については(Inq.)と略記した。領域はクロッパーら(Klopfer & Davidson)¹⁹⁾に従い()内に記してある。ロールシャッパ・テスト(以下ロ・テストと略記)の施行日時はS・A(昭和57年2月10日)、母親(昭和57年4月27日)である。

いの (D₂) 枝。これ (d₁) ヤナギとかがでている変わった木。 W F± PI

③ (Per.) 上から落ちて木が真二つに分かれている。その上に大男が乗っている。(Inq.) はじめに大男が上から落ちてきてさけた。大男が落ちてきたために木 (D₁) がおれた。55"

W M±, Fm H, PI

《M》

① (Per.) 5"△ 毛皮を払げてほしたようなかんじ。(Inq.) モコモコ柔らかい。しなやかなかんじ、ケモノのような足 (D₂)、尻尾 (D₁)、足、顔 (d₂) のかんじ。 W Fc± Aobj

② (Per.) 動物の後姿に尻尾があって立っているよう。(Inq.) 大きいオランウータンかゴリラが後向いて立っている。毛の長い動物。1'

W Fc± A

[カードV]



① (Per.) 5"△ チョウみたい。(Inq.) 紋白蝶、これ (d) 後についてるの、花にとまっている。羽 (D₁) がこう下になっている。

W FM± A P

② (Per.) なんかぶつけて、変な形になった。(Inq.) 両方から来て、粘土みだいのきて、はじめはちゃんとしていたが、ぶつけた時こんな形にぐにゃとなった。 W mF Obj

③ (Per.) 合わさっていたのがちぎれそう。(Inq.) はじめ、こことここくっついてたのが、何かでパッと分かれて、上下がくんと分かれた。40"

W mF Obj

《M》

① (Per.) 3"△ これは蝶々が羽を払げたようになって、上に向かって飛んでいるよう。(Inq.) 足 (d₁)、後、尻尾 (d₂)。アゲハみたいに2本に分かれている。留ってるんじゃなくて、スーッと気持ちよく上に昇っている。1' W FM± A P

[カードVI]



① (Per.) 10"△ ミサイル。(Inq.) しぶぎみだいののは砂煙、下に向っている。 W Fm干 Obj

② (Per.) < 戦車が川に映っている。(Inq.) 前の方に進んでいる戦車。砲台、これ (D₂) 草みだいのあ。 (上) 本物の戦車、(下) 映っているもの。

W FK+, Fm Tr, PI

③ (Per.) △ 誰かが投げた石が鏡にあたった。(Inq.) 正面から投げて、上 (D₂) にあたってから、下に (D₁) きて、下の方が大きく破れた。上で穴があいて、下に落ちた。50" W FK干 Hole

《M》

① (Per.) 10"△ ムササビをひっくり返したよう。飛んでるみたい。(Inq.) 足、手、皮の毛のどこ、天井向いて飛んでいる。背中の辺濃い。ふわっと飛んできて飛びついたよう。ここ2つに分かれているの皮。1' W FM±, Fc A

[カードVII]



① (Per.) 10"△ 鳥が兎の耳にかぶりついている。(Inq.) これ、へんな新型の名も分からない鳥が兎にかぶりついて食べる。肉食、タカカワシ、羽 (d₂)、身体 (D₃-d₂)、足、耳、顔 (D₂)、草ムラ (D₁ × 1/2)。

② (Per.) 狼が口を開いている。(Inq.) 恐犬病にかかったような狼がいる。目 (d₁)、口 (S)、身体 (D₁)、こんな大きい口だから兎とかいっぺんに呑みこむ。40" D FM干 A

《M》

① (Per.) 10"△ (はじめて手にとる) 兎がひっくり返って(逆立ちして) 踊っている(透かしてみる)。(Inq.) 女の子? そんなかんじでもない。このかんじで兎、足 (d₂) がほわんと柔らかくて

兎のようなかんじ。50" D FM±, Fc A
〔カードVIII〕



① (Per.) 5" / 変な魚が光線をだしてうち合っている。下に町が見えて、そこに行っている。
(Inq.) こことここ (D₁) 同じの。人間みたいな、魚みたいなもの。こことここ (D₃) 光線銃うっている。2人は町から出て遊んでいる。光線銃発射して盲滅法にうっている。 W M± H, Obj

② (Per.) 引っぱって紙を切っているよう。(Inq.) これ紙が貼ってあって敵がこないように貼ったが、そこを破ってしまった。こっちの町(左)の方が強かった。2人で闘っていて、紙を破れば向うの町に行けると思った。45" W F± Obj

〈M〉

① (Per.) 5" / 舟の帆かヨットのよう。(Inq.) ホンコンのジャック。帆をはってスーッと行くよう。奇麗な舟ではなく、人間が住んでいるかんじ。

② (Per.) 小鳥, インコ, 色が奇麗だから。(Inq.) インコがつかまって留っている。 D FC± A

③ (Per.) = ② イモリ(トカゲの大きい)。(Inq.) 手と足, 頭の三角になった爬虫類。

D F± A P

〔カードIX〕



① (Per.) 10" / 怪獣が復讐にきて人や天使がバラバラになっている。(Inq.) 目 (D₂) から炎をだして怒りに燃えている。これ天使 (D₁) 羽, 手, 下に町がある (D₆)。ひとかたまりの人間がいて逃げていく。それで怒って炎が頭のとっぺんまできた。(町?) ホテル, 自動車, 道が広くて歩ける。一分ぐらいで駅から家までつける。

W FM±, m (H), Arch, Fire

② (Per.) 真中から半分になされているようなかん

じ。(Inq.) 真中がここ (D₈) でこういう顔みたい。いつの間にかここで光線銃か何かで真二つに分かれて会えなく(会わなく?) になってしまう。1'

W m Obj

〈additional〉

復讐の怪物が2匹 (①+additional) いる。向うにも一匹いる。真中で合体する。向うのはここ怪物の鼻 (S), ここ目 (S), もうひとつの怪物の角。

W M, FK (H)

〈M〉

① (Per.) 20" / 伊勢エビ。(Inq.) 色と形。ここ角 (D₂), ギザギザ2本, 色のかんじ。

D FC± A

② (Per.) 森, 木があって拡がりがある。(Inq.) 森林, 大きい木とその上が太陽 (D, S)。色と段々で全体的に空。こじつけみたいだけど, ピンクのとこ (D₆) がクルッととなっているのが薔薇の固りみたい。1'10"

W F± Pl

〔カードX〕



① (Per.) 5" / 山に登っている人。山の上でケンカしている (D₃)。山を崩そうとしている人。(内側からくずれていく)。(Inq.) これ (D₁₃) 山に登っている人。ここ (D₁₆) 崖みたいになっている。死火山の山の崖, 中に行く程広くなっている。4人で登っている。これは (D₆) 崩そうとしている。

② (Per.) ミサイルが飛んできている (D₁₃)。(Inq.) ここ (D₁) で爆発されたので両方からだして(でて?) やっつけようとしている。(2つの小さいのと小さいのが争っている。ライバル同士。) はじめ左をうって, 次に右のがやられる。

D M干, Fm H, Obj

③ (Per.) 向うの方に同じようなのがみえる (D, S)。(Inq.) 近くにあるのと, 遠くにあるもの (①+②を小さくしたもの)。50"

D FK± Obj

〈M〉

① (Per.) 10" / 標本(色んなものがひとつのところに置いてある)。(Inq.) エビの頭(目・形が似てる) (D₃), 竜の落とし子 (D₉)。40" W F± Obj

S・Aは most liked card に X カードを選びその理由として「複雑だし、いろんな絵がついている」とのべ、most disliked card に V カードを選びその理由は「単純すぎる」からとしている。これは母の most disliked card が I カードであり、その理由が「気持ち悪い」というのと好対照をなしている。つまり、S・Aは好き嫌いをそのカードがおこさせる感情ではなく、複雑、単純という形状によって選んでいるのである。

さらにこのことを証明するかのごとく、S・Aは母親カード、II(ここ目で、ここ口、似てる)、自己カード、VII(この白いとこ、こう見るとボクの顔の形に似ている。あと肩幅が似ている)を選んでいるが、() 内に示したように外的な形のみで選択している。一方母は、父親カード、IX(分からない人)、自己カード、II(明かるいがいいかげん)、S・Aカード、VI(軟弱なくせにすばしっこい)と選んでいる。ここでもS・Aの選択は14歳という年齢にも拘らず、母に比較すると極めて、内面化の少ない、外的条件のみで決定されていることが分かる。ここにおいて、S・Aのカード選択からだけでもS・Aにおいては他人の内面(=感情)を理解することがむずかしく、ひるがえって、自分自身の感情も理解しにくいという構造があるのではないかということ推測させる。

S・Aのイメージ内容の特徴

ここでS・Aのイメージの特徴をひろってみると、まず目につくのは①ひっぱられて真中からさけているイメージがとても多いということである。「両方から引っぱられている人(カードI)」、「さけたガイコツ(III)」、「怪物がちぎれている(III)」、「真二つにさけた木(IV)」、「合わさっていたのが離れそう、ちぎれそう(V)」、「破れた紙(VIII)」、「バラバラになった人や天使(IX)」、「真中から半分にされて見えなくなった(IX)」などやたらに多い。筆者はこのイメージの中にS・Aの実母との分離を強く感じた。筆者がそれを母親に伝えると、母親(=継母)も合点がいくとのことであった。

次にあげられるのは、②何かが鏡に映っているというイメージ(=対鏡反応)が多いということである(これは同一性危機の指標になるとされてい

る^{20,21)}が詳しくは後述する)。例えば「鏡に向っておじぎをしている(II)」、「戦車が川に映っている(VI)」、「鏡(VI)」、「向うの方に同じようなのが見える(X)」などである。ここにはS・Aが自分とは何か分らずに、一生懸命それを鏡の中に探している様が連想される。同一のものを求める、それ故に鏡(同一のものをうつすもの)はS・Aにとって強く意識されるのではなからうか? ちなみにS・Aが治療開始後4ヶ月目にみた夢は次のようなものであった。

……ある一人の少年が町を歩いているとき、ボクに会って、その子が迷子になっていたので家に連れて帰った。お腹もペコペコだっていうから、家に連れて帰った。次の日にやっとその子の正体が分った。5、6歳の子、男の子(5、6歳はまさにS・Aが継母にひきとられた年である—引用者)魔法が使えて、むやみに使うと身体の中のエネルギーが使えなくなる。

その子について、熊に襲われそうになったとき、その子が魔法を使って熊をたおしてしまった。

ボクがボカーンとしていると、いっしょに帰ろうというところで目が覚めた。……

これはまことに興味深い夢である。S・Aは5、6歳の頃の自己に出会い、これから何処へ行こうとしているのか? そして、この魔法を使う子とは誰なのだろうか(もしかしたらそれは治療者かもしれない²²⁾)。

さらに、S・Aのイメージに特徴的なのは③喧嘩(=戦争)をしているイメージである。「ケンカを止めている(III)」、「魚が光線銃をだしてうち合っている(VIII)」、「山の上でケンカ(X)」、「小さいのと小さいのが争っている(X)」などである。加えて、これは③とも関連しているが、④攻撃的なイメージが多いことも目立つ。「怖そうな人の顔(I)」、「大男が落ちてきたためにさけた木(IV)」、「ぶっつけて変な形になった(V)」、「ミサイル、戦争、誰かが投げたもの(VI)」、「鳥が兎の目にかぶりついている、狼が口を開いて兎を呑み込む(VII)」、「光線銃、紙を破る(VIII)」、「復讐の怪物(IX)」、「死火山、ミサイル(X)」などがそれである。これはPFスタディにみられた外罰傾向の極端な強さとも一致していることからみて、外見とは裏腹に、S・Aの中には抑制された攻撃性がかなり強くあることが推測される。

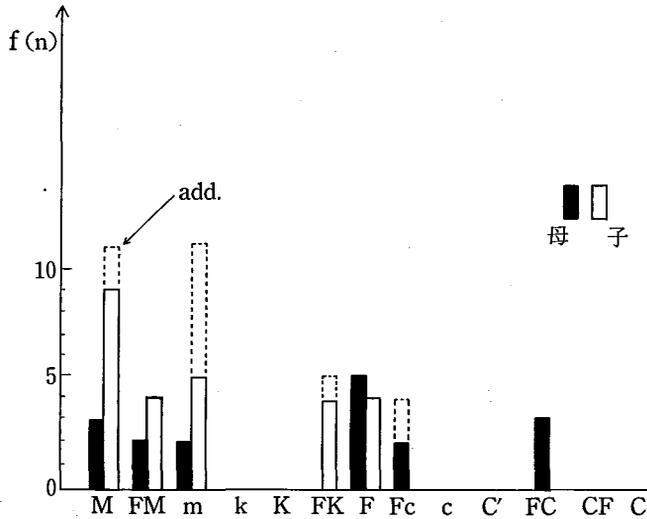


Fig. 4 母子のサイコグラム

以上あげた ①裂けたイメージ(分離不安)②対鏡反応(自我同一性の未確立, ナルシズム)③喧嘩のイメージ(去勢不安)④攻撃的なイメージ(抑圧された攻撃性)という4つの軸が, S・Aの問題を考えていくさいの重要なポイントになると思われる。

III. 母子それぞれのロ・テスト反応からみた母子差とイメージの母子インタラクション

A. サイコグラムからみた母子差

Fig. 4に母子のサイコグラムを示した。また, Table 1に母子の量的比率を示してある。()内がS・Aのものである。Fig. 4からみてとれるのは, ①S・Aが極度の内向型であるという決定的な違いである。つまり, S・Aは内面的なイメージがとても豊かであるのに対して, 母親は内面だけでなく外的な面に対して十分に反応していける柔軟なタイプであるということである。次にあげられる特徴は ②S・AのM反応が9個と圧倒的に多いということである。これに対して母親のM反応はわずかに3個である。また, S・AのH%は46%である。M反応の多さは「他の人とよい共感的な関係をもちうる能力」²³⁾とされている。M反応の多さからみて基本的にS・Aは対人的に適応していける能力をもっていると考えられる。しかし, S・A

のM反応のうち, 形態水準が±に判定されたのは9個のうち4個であとの5個は干に判定されたのである。この干の反応についてそのイメージをみると, 「両方からひっぱられ(引き裂かれている)人(I)」、「ケンカをとめている(III)」、「人間みたいな魚みたいなのが光線銃をうち合っている(VIII)」、「山の上でケンカしている人(X)」、「2人の小さいと小さいのが争っている(X)」と「争い」のイメージが全てである。このことはS・Aの共感性の良さ(とみえるもの)が, その内容としては人間の喧嘩場面への敏感さにすぎないのではないかということを予想させるのである。(恐らく父と離婚した実母

の喧嘩の場面をS・Aは何度となく目撃し, 小さくおびえていたのではないと思われる。ちなみに, この実母はS・Aの世話を全くしない人だったようである。)残りの4個のM反応(±の反応)については「羽をつけて飛んでいる人(I)」、「挨拶している人(II)」、「大男(IV)×2」というありきたりの反応である。したがって, S・Aの共感能力は, そのイメージが「争い」である場合かなり自己防衛的な敏感さへと変貌をとげているように思われる。

さらに, ③S・Aの反応は, 母と比べて圧倒的にm反応が多いということがあげられるだろう(m=5, additionalも含めるとなんと11個)。mが「緊張と葛藤を示す」¹⁹⁾指標であるとするならば, ②のところでのべたように, S・Aには非常に対人的緊張と対人的葛藤の多いところがあるという予想はさらに確からしく思われる。m反応においても形態水準が±のもの2個, non-Fが3個と, 形態水準の低いものが多いことが目立つが, それらの反応のイメージ内容はいずれも, 「ちぎられた怪物(III)」、「ぶっつけて変な形になったもの(V)」、「ちぎれそう(VI)」、「ミサイル(VI)」、「半分になされている(IX)」といったように引き裂かれたような(去勢的な)イメージが多い。このように対人的緊張が高く, 対人的葛藤が強いことから, Mが多くさらにMがFMの数より多いことは決して額面どおりには受けとれないこと, すなわちS・Aの防衛の高さを予想させる。

Table 1 まとめの表 (Summary Scoring Table)

| | | | | | | |
|-----------------------------|-----------------------------|-----------|---------------------|-----------------------|------------------------|-------------------|
| R (total response) | 17* (26) | W : D | 11 : 5 (21 : 4) | FC+CF+C : Fc+c+C' | 2 : 2 (0 : 0) | |
| Rej (Rej/Fail) | 0 (0) | W% | 65 (81) | FM : M | 4 : 3 (4 : 10) | |
| TT (total time) | 550" (520") | Dd% | 6 (0) | F%/ΣF% | 23/94 (19/88) | |
| RT (Av.) | 32.4" (20") | S% | 0 (0) | F+%/ΣF+%/R+% | 50/81/76 (40/43/38) | |
| R ₁ T (Av.) | 13.1" (6.8") | W : M | 11 : 3 (21 : 10) | A% | 18 (8) | |
| R ₁ T (Av. N. C) | 3.8" (8") | E. B | ΣC : M | 1 : 3 (0 : 10) | At% | 6 (8) |
| R ₁ T (Av. C. C) | 9.3" (5.6") | | Fc+c+C' : FM+m | 2.5 : 6 (0 : 11.5) | P(%) | 3(18%) (2(8%)) |
| Most Delayed Card & Time | IX·20" (I·VI·VII·IX·10") | | VIII+IX+X/R | 35% (27%) | Content Range | 7 (7) |
| Most Disliked Card | I (V) | FC : CF+C | 2 : 0 (0 : 0) | Determinant Range | 6 (5) | |

*上段 母 下段 () 内子

④S・AにはFK反応が4個(additionalも含めると5個)あり、それは、鏡や水に映っている姿あるいはこちら側と同じ風景が向うにも存在しているという反応である。このように鏡や水に映った姿をみることや、自分の見た一つの対象世界を遠ざけてみる見方の中にも、S・Aの特徴である対象との間に距離を保つ防衛方法が予想されるのである。ちなみにクロッパー¹⁹⁾はFKを「その人が自分の不安に対して理解し耐えていこうと努力していることを示す」とのべている。また細木²¹⁾は上述のFK反応(Vista)の多さを、個体の同一性危機とのつながりをもつとして、思春期危機との関連で考察している。

B. 量的比率からみた母子差

Table 1 からいくつかの特徴をひろってみる。

まず、①母、S・AともにW%の高さがあげられる(母=65%, S・A=81%)が、これは母においてWの形態水準が比較的良好で自然であるのに反して、S・Aにあっては、その形態水準が低いことが目立つ。S・AのW反応は形態水準の低い漠然とした未分化なものになってしまっている。これは先にも触れたように、「争い」のイメージにおいて著しい。

次に②母のW : Mは11 : 3で(W > 2M) がある。

これは「要求水準の高さ」¹⁹⁾を表わしていると考えられるが、筆者が母親と面接した印象では、この要求水準の高さが、S・Aの夜尿を治してあげよう、S・Aをなんとか理解していこうという良い方向に作用しているのではないかと感じられた。ところで、母親はFig. 4より両向的傾向をもち、内面への反応と外界への反応とバランスがとれている。さらに、Fcを「個人がその愛情、所属、満足すべき接触を求める欲求を処理する方法」¹⁹⁾であり「他人および自身の、愛情欲求の受容と認知を示す」¹⁹⁾とするならば、先にのべた要求水準の高さは、母のバランスのとれた性向や愛情の質の良さや相俟って、S・Aへの理解を高める一助となりえているのではないかと考えられる。ちなみに筆者は、S・Aがこの継母に引き取られることによって、実母とひき続き暮しているよりもずっと良かったのではないかと感じた。特に下の子(妹)が生まれてから、母親は改めて小さな子供の実態を知り、S・Aへの理解が不足していることを実感していったようである。母は、夜尿がS・Aの本質的な問題ではなく、S・Aの対人的緊張と葛藤の強さ、その結果としての感情音痴や、対人的とんちんかかさこそが本質的な問題であることをよく理解してくれたのであった。

さらに、③S・AにおけるP% (8%) は極めて

低いと思われる。筆者がS・Aに面接して強く感じたのはいわゆる「すっとんきょうな」態度であるが、それは単に対人的緊張や葛藤の結果としてのみでなく、S・A自身が一般的な生活習慣を身につけていないことにも大いに関連していると考えられる。S・Aはいわば常識が欠けているのである。

④最後にS・Aの形態水準の低さについて触れておきたい。S・AのF+% = 40%, ΣF+% = 43%, R+% = 38%である。これはS・Aが形態をきちんとみれないということよりも、S・Aの空想癖のためであろう。確かにS・Aの反応は、最後に空想にのめり込むためについていきにくい。S・Aはこの空想の中で父と実母の「争い」を再現し、反復しているように思われる。まさに反復強迫²⁴⁾である。これもまた、S・A独特の防衛であろう。特に、S・Aの形態水準は、S・Aが攻撃的なイメージをロ・カードに投影するさい、他にもまして低くなると思われる。

IV. ロ・テスト反応の推測能力, 判断能力, 共感能力について

これまで母子の反応そのものと、その差, 共通性についてみてきた。しかし, 母子のロ・テストの差をみるだけでは, 確かに母子をそれぞれ別個の存在として独立させた上で, 個人としてのロ・テスト反応をみた場合よりは幾分進歩しているとはいえ, イメージの母子インタラクション(相互作用)の測面にまで立ち入る視点を得てはいない。イメージの母子インタラクションについて考察するためにはいま一歩, 歩を進め子どもの(また母の)イメージ世界を母(または子ども)がどう見ているかというところまでいかなければならない。そのような視点を得て初めてイメージの側面からみた母子の相互作用が見えてくると思われる。

Table 2 推測の3段階の測定内容

| | | 測定内容 |
|-----|------------------------|-------------------------|
| i | free response (推測) | 両者の資質(個性)の類似性 |
| ii | suggestion (暗示・ヒント) | 他者(子ども)の反応パターンの推測(判断)能力 |
| iii | explanation (説明) | 他者(子ども)の反応への共感・受容能力 |

筆者は母親(または子ども)が, 子ども(または母親)をどれくらい理解しているかをみるために, 子ども(または母)のロ・テスト反応を推測してもらった。したがって推測は母から子どもの推測(以下, 母→子と略記する)と子から母の推測(以下, 子→母と略記)という2つの方向が考えられる。

推測にいくつかの段階をもうけた(Table 2)。

i) 何もヒントを与えずに相手の反応を自由に推測してもらう段階(free responseの段階), ii) 反応内容(相手が何をみたか)のみ教えてその反応領域, 内容等を説明できるかどうかをみる段階(suggestionの段階), iii) 反応内容の領域, 内容の細かい説明をしてそれが理解できるかどうかをみる段階(explanationの段階)。i) → iii)に進むにつれて, 母(または子ども)の推測能力が低いことを意味する。結果を分かる(+)と分からない(-)に大別し, それぞれをまた3段階に分けて評定した。全体で6段階の評価になる(Fig. 5)。

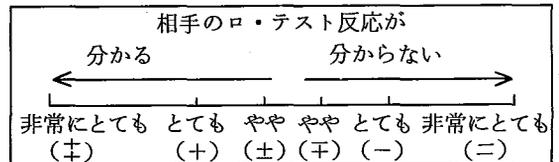


Fig. 5 推測能力の6段階評価

結果は[1]母→子の方向において, +(±, +, ±)に評定されたものが, i段階目3個(3/27), ii段階目12個(12/27), iii段階目9個(9/27)であった。また-(干, -, 二)に分類されたものが3個残った。この3個は, ①IIIカードの「ちぎれた怪物」で母は「一寸むずかしい」とのべた。また母は②「ケンカを止めている感じ(III)」については「そんなに喧嘩をしているとは感じられない」, ③「ミサイル(IV)」については「人のもの(反応)だから分からない」と分からない(共感できない)理由をのべている。母はとくに②の「ケンカ」を理解できなかった。確かにS・Aのこの反応は筆者が客観的にみてもむずかしく, 母が分からないのはむしろ当然のことと思われる。S・Aの病理の根深さが予想される反応でもある。

次に[2]子→母の方向の推測については, +に評定されたものがi段階目で1個(1/17), ii段階目9個(9/17), iii段階目5個(5/17)であった。-に分類されたものが2個残った。この2個の反応は

①「舟の帆(VIII)」で、その理由としてD₁の領域が余計だとしている。S・A自身はこの領域を変な魚としている。また②「森(IX)」という反応を「なんとなく分かる」という消極的肯定に留めているので干に評定した。①については風を受けて走る舟の帆、②については拡がりのある森を連想させるが、このようなプラスイメージを共感できないところにもS・Aの対人的な「うちとけなさ」あるいは愛情を十分に受け入れられないところが表現されているのであろうか？

母→子、子→母の推測の違いはこの手続き全体について母子がもった感想の中にもあらわれている。母はこの手続への感想として「小2の時引き取った。何でも一人でやるのが子どもだと思っていたので大変だった。S・Aに何か緊張したものをを感じる。それが分かれば、S・Aもほぐれてくると思う。(S・Aの気持ちが段々揃ってきて)空恐ろしいものがなくなった。(S・Aの)イメージが揃った」とのべている。母はひきとった時から、S・Aの中にある不全な部分に気づき、なんとかしてS・Aを理解しようと努めてきたように思われる。したがって、筆者のイメージ推測という試みにも積極的に、S・Aのイメージが分かってよかったとのべた。

これに対してS・Aはこの手続全体に対して「一寸と分かんなかった。お母さんも(ボクと)同じものを見ていると思っていった。お母さんの見ているもの分かんない」という。S・Aは母が自分と同じイメージをもっていると信じていたようである。そして、同じものを見えないことが不思議でならないという様子であった。この事実から想像するに、S・Aは他者一般も自分と同じことを考えていると思っているのではないか？ それ故に、S・AのM反応の多さは決して共感性のよさを反映しているのではなく、防衛的に発達した空想能力の豊富さにすぎないのではなからうか？ また、他人も自分と同じことを考えていると信じているとすれば、客観的に存在している生きた他人を理解するという努力はなおざりにされていくのではないかと思われる。

Table 3に母子間(母→子、子→母)の各段階における推測率を示した。数値はいずれも各段階で-に評定された%である。母→子、子→母とも

に似たような推測率であるが、iiの suggestion 段階のみ差が大きい(母→子=44%、子→母=29%)。これは子どもの方が suggestion 段階では推測が良いことを示している。筆者の印象では、これは母の反応の方が理解しやすい(したがって判断・共

Table 3 母子間の各段階における推測率

| | 段 階 | 母→子の推測率 | 子→母の推測率 |
|------|------------------------|---------|---------|
| i) | free response (推 測) | 89* | 94 |
| ii) | suggestion (暗示・ヒント) | 44 | 29 |
| iii) | explanation (説 明) | 11 | 12 |
| | R (反応数) | (27) | (17) |

*単位は%・数値は各段階で-に評定されたものである。

Table 4 母子同質性指標(SMC)の得点スケール

| ポイント | ス ケ ール | |
|------|-----------------------------------|--|
| 5 | 完全に同じ反応である。 | e. g. 母：子：蝶々が飛んでいる。(カードI) |
| 4 | 一致していないが似ている。 (例えば2つとも平凡反応である) | e. g. 母：蝶々、子：蛾(カードIII) 母：バイオリン、子：三味線(カードVI) 母：蠅の顔、子：カマキリの顔(カードIII) |
| 3 | 部分的に一致しており、一致している部分が大きい。 | e. g. 母：女の子が2人で話している。 子：ポニーテールの女の子が岩の上に乗っている。(カードVII) |
| 2 | 部分的に一致しているが、いまだ一致していない部分が大きい。 | e. g. 母：鳥が話し合っている。その間を蝶々が飛んでいる。 子：2人の人間が太鼓を叩いている。その間を蝶々が飛んでいる。(カードIII) |
| 1 | まったく違う反応である。 | e. g. 母：鬼が笑っている。 子：象が鼻をくっつけている。(カードII) |
| 0 | Rejection (Failure) | |

感しやすい反応なのだという事実によっていると思われる。したがって、free responseでの推測はしにくくても(94%)、何をみたというヒントを与えられたのみで判断しやすくなったのであろう。さらに、S・Aはそれ程明確に理解できなくても「うん分かった」と答えてしまう傾向もあったのではないかと考えられる。

V. 母子反応同質性 (SMC) からみた 母子インタラクション

先の報告¹⁾で、筆者は母子のもともとのイメージがどれくらい資質として似ているのかを指標化してこれを母子同質性指標 (SMC: Similarity of Rorschach Responses between Mother and Child) と名づけた。Table 4 に示したように、母子のロールシャッパ・イメージが完全に同じものであれば5ポイント、全く違うものであれば1ポイントとし、5から1の段階に尺度化した (Rejectionがあった場合は0ポイント)。

SMC算出の公式は次のようになる¹⁰⁾。

SMC=

$$\frac{\text{他者の各反応のポイント合計(Total Point)}}{\text{他者の全反応数(R)}} \dots\dots\dots(1)$$

ところでこの(1)の公式が他者を基準にして測られていることに注目していただきたい。ここで他者が基準になっているのは、Aという人とBという人がいた場合、AのイメージがBのイメージに似ているかどうかは、BのイメージがAのイメージにどれくらい似ているかによって決まるという理由による。つまり、自分のイメージがどれだけ他者のイメージに似ているかどうかは他者のイメージの中にどれくらい自分と似たイメージがあるかによっているということである。^注

これを図式化すると Fig. 6 のようになる。(Fig. 6 によれば、ここでは自分が他者に似ているということは、自分が他者を推測しやすいことと同義である。)

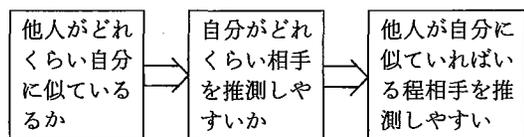


Fig. 6 イメージが似ている (同質である) ということの意味

ところで(1)の公式は、母がどれくらい他者(子ども)を推測しやすいかという方向と、子どもが他者(母親)をどれくらい推測しやすいかという2つの方向が考えられることから、具体的には次の(2)と(3)の公式に分けられる。

$$\text{SMC (M} \rightarrow \text{C)} = \frac{\text{子どもの反応の各反応のポイント合計}}{\text{子どもの全反応数(R)}} \dots\dots\dots(2)$$

$$\text{SMC (C} \rightarrow \text{M)} = \frac{\text{母親の反応のポイント合計}}{\text{母親の全反応数(R)}} \dots\dots\dots(3)$$

(2)の SMC(M → C)は母がどれくらい子どもの反応を推測しやすいか、(3)の SMC(C → M)は子どもがどれくらい母親の反応を推測しやすいかということである。

Table 4 のスケールによって、SMC (M → C) と SMC (C → M) を算出した結果、SMC (M → C)=1.67, SMC (C → M)=1.94であった (Fig. 7)。したがって、SMC(C → M) > SMC(M → C) という関係になっている。これは子どもが母親を推測した場合の方が、母が子どもを推測した場合

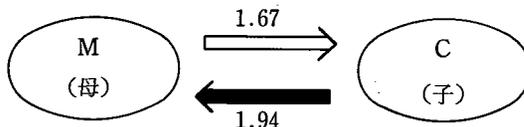
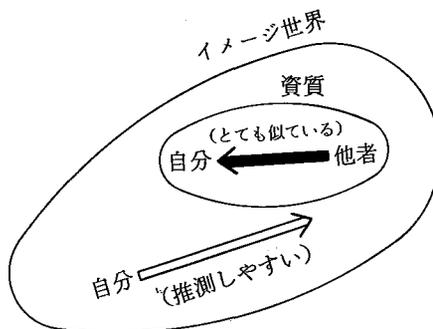


Fig. 7 母子同質性 (SMC) からみた母子関係

- * ⇄ は2者間において黒い線の方がSMCが高いことをあらわしている。
- * ← はSMC (M→C), SMC (C→M) の方向をしめしている。

注 他者のイメージが自分のイメージに似ていることが自分が他者のイメージを推測しやすいという関係を図式化すると次のようになる。



よりも推測し易いことを表わしている。

この結果は Table 3 において (suggestion 段階については) 子どもの方が母のイメージを判断し易かったという事実ともよく合致している。それ故に、本論の母子関係においては、資質として、子どもの方が母親をより推測し易い構造があるといえる。このような構造の中であって Table 3 の explanation 段階にもみられたように母の方の成績がよいということは、そこに、母の側のより意識的で努力した共感的な活動があることを確証しているのではなからうか？ S・Aはこの母が継母であったものの、①資質として母のことをよく理解することの可能な状況(=構造)があり、さらに加えて、②母親がS・Aをよりよく共感しようとしてくれる人であったという幸運に恵まれたというべきであろう。S・Aにおいては確かに、実母との不幸な母子関係のために①対人的緊張や葛藤が高く、②実母から躰をきちんとしてもらえなかったという、習慣形成上の弱点があり、これは共通して、共同化(社会化)の欠落と呼べるものであろう。これは、はじめのところで示したように、個人的世界のイメージが対偶(ペア)的關係(=母子関係)によって共同的世界のイメージに高められなかったためと考えてよい。しかし、このような欠落があったにも拘らず、ひとつには①S・Aが資質として持っている共感的なイメージの豊かさによって、さらには②継母がみせてくれた意識的共感の努力によって、たとえその努力が多少知的レベルのものに傾きがちであるとはいえ、S・Aの適応レベルは最悪のものに陥らなかったと考えられる。

要 約

習慣性(1次的)夜尿の毎晩続く14歳男児の症例を報告した。患児は治療開始後4ヶ月にて約80%夜尿がなくなり、現在ではほとんど症状が消失した。治療法として、子どもには行動療法の一つであるToken Economy法をつかい、母親へは一般的な指導的カウンセリングを行った。

本症例ではその母子関係が継母子という関係にあった。患児は6歳の時ひきとられた。実母と父は離婚し、父はその後再婚したのである。実母は患児の世話を全くしなかったらしい。患児は初期

の母子関係において十分なケアをうけていないために、①対人的緊張や葛藤が極めてつよく、②また、躰をしてもらっていないために生活習慣にも不全があった。しかし、このような欠落をもちつつも、①患児が資質として持っている共感性のよさへ通じる内面的対人イメージの豊富さ(しかし現時点では単なる空想癖に留まっている)と②継母が資質として持っている共感能力のよさと意識的な育児努力のために、曲りなりにも社会生活を営んでくれたように思われる。

上述の見解はExchange Rorschach Method(母子がそれぞれ、ロールシャッパ・イメージを推測し判断し共感することによって、相手に対する理解を深めるという治療法)のプロセスの中から浮かびあがってきたものである。この他にも、相手のロールシャッパ・イメージをどれくらい推測できるか(推測率)や、SMC(母子のイメージが資質としてどれくらい似ているのか、あるいはお互いを推測しやすいのかの指標)などをつかって、患児の母子関係の特質が明らかにされた。

ERM(Exchange Rorschach Method: 交換ロールシャッパ法)は相手の内面世界を知るのに有効であり、推測率やSMCは指標として妥当であることが示唆された。今後例数を増やす中で、これらの方法と指標をさらに深化させていきたい。

謝 辞

最後に、症例の公表を許可された東京慈恵会医科大学小児科教授前川喜平先生にお礼を申し上げます。また、日頃の御指導に深謝いたします。(なお、本症例は1982年9月の小児精神研究会で口頭発表した。)

引用文献

- 1) 井原成男: イメージの母子相互作用——心因性頭痛をもつ女兒のロールシャッパテストに反映した母子相互作用——。長野大学紀要, Vol. 4, No. 1・2: 43—59, 1982.
- 2) カルフ, M.(河合隼雄監訳): カルフ箱庭療法, 誠信書房, 1972.
- 3) 井原成男: 人が怖くてたまらなかったS・A君の作品『にわとり村のめんどりおじさん』の分析。長野大学紀要, Vol. 3, No. 1・2: 43—65, 1981.
- 4) 佐藤紀子: 無意識への挑戦, 河野心理・教育研究

- 出版部, 1974.
- 5) 吉本隆明: フロイトおよびユングの人間把握の問題点について(知の岸辺へ), 弓立社, 1976.
 - 6) 吉本隆明: 世界認識の方法, 中央公論社, 1980.
 - 7) 吉本隆明: 幻想論の根底(言葉という思想), 弓立社, 1981.
 - 8) 村瀬学: 初期心的現象の世界(理解のおくれの本質を考える), 大和書房, 1981.
 - 9) 吉本隆明: 共同幻想論, 河出書房新社, 1968.
 - 10) 河合隼雄: 母性社会日本の病理, 中央公論社, 1976.
 - 11) 井原成男: アノレクシア・ネルボーザ症例におけるロールシャッハ・テストの母子差と治療への適用. 日本心理学会第43回大会発表論文集, 652, 1979.
 - 12) 井原成男: ロールシャッハ・テストの母子差と治療への適用. ロールシャッハ研究, Vol. XXIII: 145-158, 1981.
 - 13) 井原成男: ロールシャッハ・テストからみた母子相互作用(1). 日本心理学会第45回大会発表論文集, 633, 1981.
 - 14) 井原成男: ロールシャッハ・テストからみた母子相互作用—ある夜尿児の症例研究—. 長野大学紀要, Vol. 3, No. 3・4: 19-33, 1982.
 - 15) 井原成男: イメージの母子相互作用(1)—Exchange Rorschach Methodの試み—. 日本教育心理学会第24回総会発表論文集, 1982.
 - 16) 井原成男: イメージの家族内力動—ノーマルな児童のロールシャッハ・テストからみた家族関係—. 長野大学紀要, Vol. 4, No. 3・4: 45-63, 1983.
 - 17) Herbert, M.: Behavioral treatment of problem children, Academic Press, 1981.
 - 18) 井原成男: 新刊紹介. 小児科診療, Vol. 44, No. 12: 140-141, 1981.
 - 19) Klopfer, B. & Davidson, H. H. (河合隼雄訳): ロールシャッハ・テクニク入門, ダイヤモンド社, 1964.
 - 20) 石川元(編): 鏡と人間の心理. 現代のエスプリ No. 155, 至文堂, 1980.
 - 21) 細木照敏: ロールシャッハ・テストにおける立体反応(Vista)の精神医学的意味. 精神医学, Vol. 15, No. 2: 145-153, 1973.
 - 22) 河合隼雄: 『ゲド戦記』と自己実現(人間の深層にひそむもの), 大和書房, 1979.
 - 23) 片口安史: 新心理診断法, 金子書房, 1973.
 - 24) フロイト, S. (井村恒郎訳): 快感原則の被岸(フロイト選集4・自我論), 日本教文社, 1970.